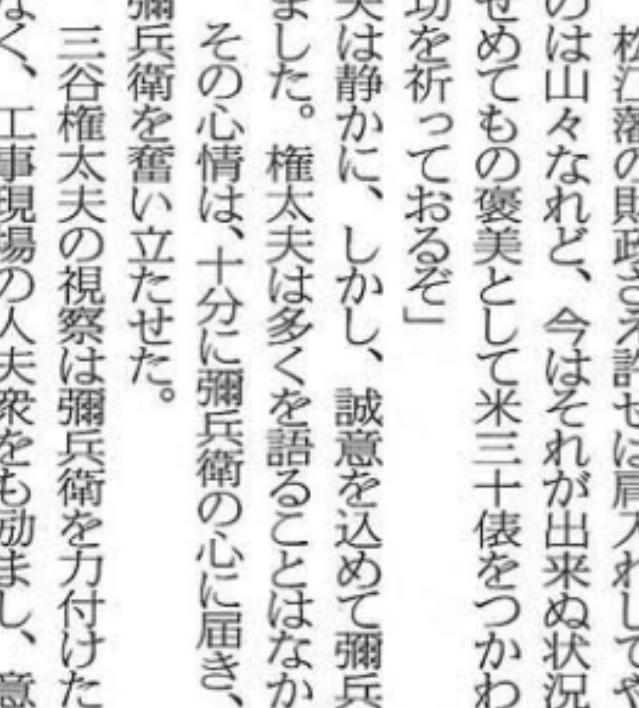


# 悠久の河

18

## 周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子



「さようか。この岩山と格闘するは、腕前は勿論のこと、知恵と精神力が問われるところである。お。彌兵衛、そちら、みごと遣つてのけようぞ。松江藩の財政さえ許せば肩入れしてやりたいのは山々なれど、今はそれが出来ぬ状況でな、せめてもの褒美として米三十俵をつかわす。成功を祈つておるぞ」

権太夫は静かに、しかし、誠意を込めて彌兵衛を励ました。権太夫は多くを語ることはなかつたが、その心情は、十分に彌兵衛の心に届き、傷心の彌兵衛を奮い立たせた。

家老、三谷権太夫の視察は彌兵衛を力付けただけでなく、工事現場の人夫衆をも励まし、意宇川の切り通しの工事は、目に見えて進展した。けれども彌兵衛のお供をする五郎太は、この手に腰を下ろして、休んで行こう

彌兵衛は五郎太を促し、草叢に腰を下ろした。

「のう、五郎太、このところ、おまえの元気の無いのが気になつておるが、なんぞ悩みが有るのか？困つたことでも起つたのか？よかつたら、わしに胸の内を聞かせてもらえぬか」

五郎太は彌兵衛に胸の内を見透かされ驚いたが、一瞬考えた後に決心したように語り出した。

「忙しい旦那さまに御心配をかけてはいけない」と一人で悩んでおりましたが、ゆうさまの御病氣が、このところよく有ります。一日一日と衰弱しておられるように思えて、じつとしていられない気持ちです。村の衆は旦那さんが剣山を削りなさつたから、竜神さまの祟りだと、もつぱら騒いでおります。私は出来ることなら、やら…と願つております。周藤の家を守り、ゆうさまのお側で、看病させていただくことが出来ましたらと、叶わぬ願いを心の中で、ずっと思つておりました。旦那さま、どうぞ、お許し下さいませ」

「そうで有つたか。五郎太はゆうが幼いころから妹のように、よく世話を焼いてくれたからのお。けど、五郎太、竜神さまの祟りで人が病気になつたりはせんぞ。水を治めようと努力している我等に、竜神さまは味方して下さることは有つても祟つたりはなさらん。その証拠に、今度の工事を始めてから四年になるというのに、水害で村が被害を受けることが無いであろう」

五郎太は、毎日を唯、唯、夢中で過ごしてきて、この四年間が、どんなに長い歳月だったのかを考えてみることもなかつた。